始

特261
163

穀紋と弥生の史的考

昭和九・十一・廿六
帝國圖書館藏

如来常住

甚深微妙

十方諸佛

普皆恭敬

而白毫相 紹見如此

觀稱と尊號の史的雜考

目次

一　三祖の弘化一班……一
二　尊號について宗祖蓮師の化風を思ふ……一三
三　蓮如上人の安心決定鈔御依用の意……二九
四　文類偈の西方不可思議尊……四五

三祖の弘化一班

住田智見述

今三祖弘化の一班をうかがはんとするにつき、左の三文を抄錄す

元祖法然上人

一枚起請文に曰く。モロコシ我朝ニ、モロ〳〵ノ智者タチノ沙汰シ申サルル、觀念ノ念ニモアラス。マタ學問ヲシテ念ノ心ヲサトリテ申ス念佛ニモアラス。タヾ往生極樂ノタメニハ、南无阿彌陀佛ト申シテ疑ヒナク往生スルゾト思ヒトリテ、申スホカニハ、別ノ仔細候ハズ。但シ三心四修ナント申スコトノ候ハ、ミナ決定シテ南无阿彌陀佛ニテ往生スルゾト、思フウチニコモリ

候ナリ。コノ外ニ奥深キコトヲ存ゼバ二尊ノ御アハレミニハヅレ、本願ニモレ候ベシ。念佛ヲ信セン人ハタトヒ一代ノ法ヲヨク〳〵學ストモ、一文不知ノ愚鈍ノ身ニナシテ尼入道ノ無智ノトモガラニ、オナジクシテ、智者ノフルマヒヲセズシテ、唯一向ニ念佛スベシ。

宗祖親鸞聖人

歎異抄初に曰く。彌陀ノ誓願不思議ニ、タスケラレマイラセテ、往生オバトグルナリト信ジテ、念佛マウサント、オモヒタツコヽロノオコルトキ、スナハチ攝取不捨ノ利益ニ、アズケシメタマフナリ。彌陀ノ本願ニハ、老少善惡ノヒトヲ、エラバレズ、タヾ信心ヲ要トストシルベシ。ソノユヘハ罪惡深重煩惱熾盛ノ衆生ヲ、タスケンガタメノ願ニテマシマス。シカレバ本願ヲ信ゼンニハ、他ノ善モ要ニアラズ、念佛ニマサルベキ善ナキユヘニ。惡ヲモオソルベカラズ、彌陀ノ本願ヲサマタグルホドノ惡ナキガユヘニト。云云

中興蓮如上人

御文に曰く。聖人一流ノ御勸化ノオモムキハ、信心ヲモテ、本トセラレ候。ソノユヘハモロ〳〵ノ雜行ヲナゲステ、一心ニ彌陀ニ歸命スレバ不可思議ノ願力トシテ佛ノカタヨリ往生ハ治定セシメタマフ。ソノクライヲ一念發起、入正定之聚トモ釋シ、ソノウヘノ稱名念佛ハ如來ワガ往生ヲサダメタマイシ御恩報盡ノ念佛トコヽロウベキナリ。アナカシコ〳〵

一

右の文を大体として窺ふに

我か淨土眞宗の別立は、正しく元祖法然聖人の淨土宗に在り。故に我が宗

祖親鸞聖人は

智慧光ノチカラヨリ　本師源空アラハレテ
淨土眞宗ヲヒラキツツ　選擇本願ノベタマフ

と嘆じたまへり。既に選擇本願なる上は、根本經典の『大經』に說きたまへる彌陀の因位法藏菩薩の願心より開示されたる宗旨なるを思ふべし。

選擇本願とは、念佛往生の一道なり。吾祖が元祖の敎を受けて「雜行をすて、本願に歸す」とこの仰せはこの事なり。依りて本願の念佛が眞宗なるを忘るべからず。こゝに於て元祖以前の願生者を一瞥するに概して觀念意念の念佛なるゆゑ、元祖は『一枚起請文』に「モロコシワガ朝ノモロ〳〵ノ智者達ノ沙汰シ申サル、觀念ノ念ニモアラズ」等と簡びたまふ。これを元祖吾祖の如き求道上の實際問題として考ふる時、始めて明白なる解決を得らるる樣なり。以下その概要を摘示すべし。

二

支那に於ける學匠としては、先づ隋の代淨影寺の惠遠、天台山の智者、嘉祥寺の吉藏を『觀經疏』の三大家と稱す。何れも皆觀佛を經の宗要と定む。唐の善導大師これを楷定して、觀佛三昧の上に更に念佛三昧を宗とすと云へり。然るに宋朝の元照律師は返りて又觀佛爲宗と云ふて善導の釋を取らず。これを以て支那淨土敎の學者が、いかに觀念を要としたるかを知るべし。

三

我が日本に佛敎渡來せしより願生淨土の思想は盛んに起こり、彼の惠隱が舒明孝德の二朝『大經』を宮中に進講したるを始めとして、奈良朝に入りてます〳〵修道者の間に重視せらるゝことなり、奈良朝の末期には、元興寺極樂院の智光禮光の願生ありて、智光は曼荼羅を畫き、同時代に當麻の中將

法尼は『觀經』に依りて同じく曼荼羅を織成せり。この曼荼羅の出現は、觀念のためなることは云ふまでもなし。又智光に『淨土論疏』五卷の著あることも注意せざるべからず。

四

平安朝に入りて、天台眞言の両宗興こり、比叡山の常行三昧が慈覺大師によりて傳へられ、慈惠を經て、惠心院の源信僧都に至りて、善導の『觀經義』を依用して常行堂の念佛が、願生淨土のための行法となるに至れり。然るに惠心も常に觀念を凝らしたまひしことは、其の傳記及び、遺物によりても知り得るのみならず、『往生要集』も稱名よりも觀念が勝行なる如くに見らるゝにても知らるべし。而して何れの行もかなはぬものには、唯稱彌陀得生極樂と勸められたるにて、後に元祖の念佛宗を興行せらるべき基礎を置かるゝことゝなれりしなり。

惠心同門の碩德として檀那院の覺運、多武峯の增賀、書寫山の性空等あり。何れも常行堂を建設して實修せられたり。然れども常行三昧は三業相應の念佛を修して、觀成を期するものゆゑ、たとひ幽玄の理觀ならざるも、これを成ずること甚だ難し。故に觀念を要行とする時は、不安と寂寞とを免るゝ能はざるなり。

然るに常行三昧の作法が、まことに殊勝なるものなれば、平安朝の優美なる風潮に應じて、都鄙の間に頗る繁昌をきはめたるなり。特に『往生要集』の影響は、非常のものにて、顯密両系の間、續々西方願生者を生じたり。慶氏の『往生極樂記』以下諸部の往生傳を繙けば、明了なるべし。而して其の多くは觀念行者なることをも看取せらるべし。

この間に在りて、勝尾寺の勝如が貞觀八年仲秋加古の敎信の告によりて、

二十年の無言を行をすてゝ稱名往生をこげられたりと云へる傳說（往生十因等）は、大に注意を要すべきことゝ思ふ。

五

元祖三十年黑谷の隱栖、吾祖二十年叡山の修學、その行法は、時代の雰圍氣中に在りて、觀念中心たりし事は、明了なり。然るに上に一言せし如く、散動の機は、いかに努力するも、不安と寂寥とを免れがたき故、泣く〳〵經論を閱し、各宗の知識を尋ねたまひしなり。元祖は惠心の『要集』より善導の『觀經疏』を精讀して、「つゐに一心專念彌陀名號が正定業、これ順彼佛願の故なり」と見定むるに及んで、始めて安心を得、吾祖亦、元祖の敎により て雜行をすてゝ本願に歸し、始めて無导の大信海に入りたまひたのである。

これを今私に案するに、觀念時代は、我等より佛を追求するのに引きかえ、

今は如來久遠の本願力を以て、我等凡愚を哀れみて、持ちやすく稱へやすき念佛を授けたまふことゝなつた。されればこの如來の選擇本願の念佛を信受する時、如來は無导の光明を以て、喜び攝取したまふこと、一点の疑はないのである。こゝに於て信心爲本の平生業成の敎義は、自然に顯示されねばならぬ次第なり。選擇本願が淨土眞宗なるを深く注意せざるべからず。本願を忘れたる稱名は、定散心自力の行なるを思ふべし。

六

元祖門下の人々、多くは選擇本願を忘却せし故、稱名の本願なれば稱へざるべからず。と自力の功を募るに至り、甚しきは念佛と共に諸行の往生をも勸めんとするに至れり。鎭西、長樂寺、九品寺など、多少の異はあれども、皆同樣なりと見らる。然る時は觀佛時代に現在見佛を追求したるものが、今

は臨終見佛を期することゝなり、亦不安と寂寥とを感ずることゝなるは、已むを得ざることゝ云ふべし。

此間に在りて西山のみは、佛体即行の教義を主張して、平生往生を云へり。これ今述べたる不安と寂寞とに氣付きたるためなるならんかとも思はるゝなり。元祖門下の諸流に於て曼荼羅を夙くに珍重依用せしは、西山なりしことも、注意すべきことなるべし。

七

今眞宗は一度宗祖の本願力廻向念佛の信心を顯示したまひてより。名体不離（六要八の九右は名体不二）の信心を傳燈の要義とせられたるは勿論なり。而して覺存両師諸宗研學の時、西山教義を阿日房より受けたまひ、覺師は自著と共に西山書たる『安心決定鈔』をも高弟乘專に授けたまひし（反古の裏）と云ふ。

一時宗門衰頽の極に達し、蓮師再興の時代には、鎮西は關東には了譽西譽、京には禮阿向阿の感化盛んなりしあり。西山亦、顯意、堯惠、示導、實導等の諸德の化を垂れし後にて、その多くは口稱を勵みて、臨終來迎を期するもの京田舍に滿ち、又十劫安心などもありし時代ゆゑ、念佛のいはれより彌陀の願意を明に了得せしめんとて、雜行をすてゝ彌陀をたのめと教へたまへり。この時に當りて特に、『安心決定鈔』を珍重して依用されたることの深意あるを思ふべし。

今列祖の示されたる御語の要は

- 元祖――捨雜行歸正行
- 我祖――棄雜行歸本願
- 蓮祖――捨雜行歸彌陀

これを以て三祖弘通の一致せる点と、其信心表示の左右あることゝを知る

べく、而して亦求道の實際問題として所歸の人法の偏廢すべからざるの道理を會得せらるべし。然れば現代求道者の苦悶の何にありやを考察せば、必ず自得する所あるべきを思ふなり。

尊號について宗祖蓮師の化風を思ふ

一

願生行者として西方の教主を念ずる者、みな稱名するは南無阿彌陀佛の六字である。既に『觀經』下三品に兩回まで此名號が出で、化佛は「汝稱佛名故」と讃し、知識は「應稱無量壽佛名」と勸む、又『大阿彌陀經』下（廿九右）の靈山見土の阿難の稱名も南無阿彌陀三耶三佛檀と言へり。それよりして漢和願生の諸先德みな稱佛六字なりしことに異議はないことと思はれる。加之印度の願生者も先づ此佛名を念じたことであらう。

『小經』に依れば光壽の二德をあげて「故名阿彌陀」と說き、『禮讃』（七丁）には之を觀經の念佛攝取に會合せり。大經異譯の『大乘莊嚴經』中（二左）重誓偈

には、魏譯の「名聲超十方究竟靡所聞」を「立名無量壽衆生聞此號」と示さる。本より阿彌陀は無量なれば、それに光壽の二德を具する故のことたるは勿論である。魏譯の勝報段に「無量壽佛號無量光佛」等と說けるも、其義の大體に於て異るを見ず。今はこれらの義を論ぜんとするのではない。要は先づ六字名號に彌陀佛德の全具成就するを知れば足るのである。近く元祖の『選擇集』に法藏菩薩選擇の願意を勝劣難易の二義を以て釋したまひしにて明かである。古今願生者が六字名號を稱へたるも、恐らくは此兩意を出でぬであらう。（廬山惠遠の念佛三昧詩序、張掄の結社普勸文など）併しそれを功利的に稱名を取ると選擇本願の意を得ることで、稱名の意義に天地の違がある。求道に志あるもの深く思はざるべからず。（宗祖の御本書行卷の大行釋化卷 自五十右 の罪福信釋對見あれ）

二

我が宗祖親鸞聖人も『御本書』を始め『正像末和讃』に至るまで處々に六字を示されたる意も同樣であると思はる。然るに同じ稱名なれども、元祖を相承し給ふ上は選擇本願の念佛にて、この名號の意義を深く信樂する事を際立てゝ示されたる所に我が聖人の別意を存する。即ち名號を固定したる概念扱ひにはせず。名號を即ち佛の願心也佛智也大悲眞實也と拜して、名號成就のいはれよりして我等凡愚の救濟さるゝ佛願難思の大悲心を頂くと云ふが、聖人終生の化導であつたと窺はるる。是れ即ち建仁元年廿九歳の春元祖に入室したまひし當初の弃雜行兮歸本願の信念より起こるのである。　されば『御本書』に大行を示すに「稱無碍光如來名云云」と示したまふも本願成就の無碍光如來の尊號を稱するのが大行ぞと顯し、次に稱名に破滿の德を出だすも、六字の義を本願と光攝とより釋するも、要は六字名號は我等衆生を待ち

わびたまへるいはれぞと開示したまふ御意なるべし。（無碍難思は常に離さずに釋せらる。『愚禿鈔』下廿一右『銘文』本八丁『唯信文意』二丁等處々。無碍の御解釋も注意あれ）

こゝに於て大體より見るとき、無碍光如來の名號と仰せらるゝは、無碍光如來と云へる特別の佛の御名が南無阿彌陀佛なりと云ふことである。更に云はゞ無碍光如來（表德）も亦不可思議光如來（遮情）も、六字と共に如來の尊號なれども、無碍光と不可思議光は佛身を顯す時の名となり、南無阿彌陀佛は名號を示す時の名となるが大體なりと窺はるゝ。されば御本書の上では名體本來不離（六要八九右には不二とあり）なれば互に通じて示されたるやうなれども、『眞佛土卷』には先づ佛を不可思議光如來とし、終りには『論』の歸命盡十方無碍光如來をも出だしたまへり。『行卷』は名號としての位ゆゑ六字を無碍光如來の御名と指す意なりと見ゆる。併し此の三號互に通ずべき

義あるを以て、『行卷』所引中に『論註』の無碍光如來の釋が出で、『眞佛土卷』には『讃彌陀偈』の歸敬の南無阿彌陀佛が引かれてあるにて明かなり。たゞ『御本書』所明の大體と宗祖平生の御示しとより且らく辨別の意を窺ひたるにすぎぬ。今一例を出ださば『五會讃』の如來尊號甚分明を『唯信文意』二右に釋して、「如來トマフスハ無碍光如來ナリ尊號トイフハ南無阿彌陀佛ナリ」の文である。此指南より廣略文類の行の釋を見れば、前述の如く稱無碍光如來名とある意、本願成就の盡十方無碍光如來の御名たる南無阿彌陀佛を稱するとの思し召しが知らるゝ。存師の『教行信證大意』では尚明了に知らる。

三

依之宗祖が所謂禮敬の爲に染筆したまひしと傳ふるもの、十中八九までは八字九字十字の尊號なる御意も知らるゝ。彼の善鸞法師へ授けたまひしも無

碍光であり（慕歸四三右　敬重五五右）高田本山其他に現存する宗祖墨書の名號亦多く無碍光不可思議光である。たゞ西本山に墨書の六字あるは宗祖では實に希有のものと思ふ。泥字の尊號九十字は到處に拜見するのである。（其多くは十字は楷書九字は行書となりてあるを例とする）其筆の眞僞は別に研究を要せん。

さて宗祖は元祖の御化導にて如來選擇の願心より念佛往生の旨を深く信樂して、終生此旨を慶嘆したひしことにて、報恩の稱名は六字なれども、所謂無碍光如來の尊號たる南無阿彌陀佛を稱するの故、稱名は即ち嘆佛であり、懺悔である。口稱に拘はる概念の名號ではない。如來の願心智心大悲心眞實心そのまゝ成就が佛號ゆえ、此の佛心の徹底したる信心また無碍廣大の淨信であるは云ふまでもない。我等の心をつくろひめでたうなすやふなる自利眞實とは雲泥の相違がある。これは單の理論ではない。深く己か能を思量して

始めて如來本願の生起の偶然ならざるを會得し感謝せらるゝのである。要するに選擇本願は概念ではない。念佛往生の信心は、眞實大悲の徹底である。隨ふて信後報恩は憶念稱名精みある慶嘆に外ならぬ。此意味よりして稱名も六字を稱ふるばかりでなく、無碍光佛不可思議光佛を稱ふることもあるべき筈なり。彼の高田の覺信坊が聖人の禪坊にて終焉に臨むとき、聖人その心中を隨喜落涙したまひ（口傳鈔下六左）最後南無阿彌陀佛、南無無碍光如來、南無不可思議光佛と稱へ、手をくみて靜に終はられたることは、蓮位坊より慶信坊への通知に見えてある。又この狀より慶信は稱名は六字のみなりや又九字十字などを稱ふる人もあるが如何との御尋の狀を聖人に呈した。其御返事も『末燈鈔』三十四右及び三十六右に收めてある。蓮位の狀も慶信の狀も高田本山に現存して居るので、疑ふ餘地はない。

要するに稱名と云へば六字を稱ふるは勿論なるが、それを概念化化石化せ

んとするに對して、宗祖は如實修行を顯さんとて、『論』『論註』によりて稱無碍光如來名等と仰せられた。稱名とは無碍光如來の名號六字を稱ふるなり。その名號に既に佛の願心があらはれたるを以て、歸命するものは必得往生する。（行卷自釋六左以下參照）されば此旨は善導の言南無者釋等、元祖の二行章五番相對に顯はれ、別して不廻向廻向對の釋にても知らるゝ所である。我が聖人が行も信も他力廻向也と積極的の御釋の顯はれたるは、佛の願心に歸入したまひたからである。

六字九字十字の宗祖御筆の中、南無盡十方無碍光如來の墨書、高田本山に現存する。報恩行の口稱と禮敬との表示の異のみなれば、此御書き方にも注意を要するのである。又南部本誓寺光明本に不可思議光無碍光には光明を放ち、六字には之れなきも、上述の意味に於て注意を要せん。

四

已上は宗祖の上のことなるが、覺師も『執持鈔』『改邪鈔』等、存覺師も『袖日記』等を見ると、概して宗祖の時と異らぬやうに思はるゝ。

然るに宗祖より約二百年後中興蓮如上人に至ると、多少樣子の變はれるを思ふ。蓮師御一代は『御文』『御一代聞書』にて見る時、常に六字名號の御示しは盛んに見ゆれども、九字十字のことを左程に仰せ立てられたることを見ず。勿論九字十字と六字とは互に表裏を爲すものにて不離なれども、御化風の大體より之れを見るのである。卽ち安心の體六字なれば六字より歸命の信心を勸め、信心の行者を光攝せらるゝ旨を力說したまふが常なり。『御聞書』廿三條には無碍光佛も不可思議光佛も六字をほめたまふ德號なれば南無阿彌陀佛を本とすべしとの御物語がある。蓮師御敎化の全體としては、先輩所辯の如く宗祖の御本書を覺存二師の相承を經て顯はされたることは、一々例示するまでもないことであらう。

堅田本福寺の『明誓日記』に依れば、六字のみならず十字九字の尊號を安じ、又それを書きたまひしことあるを窺ひ得べしと雖も、（各地に見る蓮師の御筆と傳ふる九字十字は大概御中年已前と見らる）御中年卽吉崎以後の樣子は、御教化のみならず、御染筆の名號まで殆んど六字なる樣に見ゆる。現存する蓮師御筆の名號大小あれども六字が多きは、之れを物語るものではあるまいか。之れを要するに蓮師に至りては、信心も禮敬も、即ち安心も報恩も皆名號六字を以て自信教人信の體として教化したまふたことと見えたり。

本福寺日記類は、古來知空師の拔書を以て行はれたれども、今は『眞宗全書』に完本出でたり。又名號御染筆の事。『御聞書』七十二條又二三一條等參照。

五

然り而して宗祖以來本尊は主として無碍光佛不可思議光佛なるやふ見えたるに、蓮師中興の時運にあたつて何故に專ら六字を以ての化風となれるやと云ふに、これ考へざるべからず。凡そ諸師他流では安心即ち菩提心は大切にはすれども、大體が行本位なり。卽ち願生の業は主として口稱の念佛を勵むに在り。それゆえ臨終見佛を期し來迎をまちて始めて業成すと云へり。云ひかえれば佛號を知らず〳〵固定したるものゝ如くに心得、概念扱ひにして佛力の强緣願力攝生の旨趣を失却することゝなる。それゆえ事實上半自力半他力義となり。自己の能力を買ひかぶりて心生憍慢に墮する。まことに惜しむべきの至りである。今蓮師は天下滔々稱名すれば往生するぞと人皆心得たる時代故、所稱の名號の內面より佛の願心の充實し成就されたる趣を打ち開きて、我をたのめ、たのむものを必ずたすけんとの佛勅なりと示さるゝことゝなれり。（御文一初、十通五、三二、三四、五、五一十等處々參照）されば其のいはれを聞き開きて、彌陀に歸する心の起るなり直ぐに攝取の益に關かるを以て、信心亦名號を體

とする。機法一體の目を使用したまふも、此旨趣を示さんとする意に外ならぬ。蓮師は願成就文と善導の六字釋とに依りて、かくの如く安心教示の內面的理由より六字を押し立てらるゝことゝなれりと見ゆる。此義勿論『御本書』行信兩卷の精髓にて、覺師『執持鈔』『口傳鈔』等の御示しにも顯はる。蓮師はそれを相承したまへるなり。されば當時概念化したる稱名について其內面より活き〳〵したる彌陀大悲の願心を示されたる處に、再興氣運を發揚する根柢があつたものと思ふ。更に換言せば口稱に滯る者は佛心に疎き冷かなる法に拘泥して居るものである。其爲に名號の義より本願成就の佛心を開き出して、我をたのめ必ず救はんと待ちわびたまへる彌陀ゆえ、南無阿彌陀佛と云ふ本願を立て、其願成就して阿彌陀とならせたまへる佛が南無阿彌陀佛の名號ぞと名體の中寧ろ體の佛心の方よりの教示が表となつたものと窺はるゝ。

そのためには『安心決定鈔』の御依用ともなりしものと思ふ。この事は別に述べたから今は詳述せぬ。尙名體の名目は西山家の常語であることも注意を要するであらう。

六

又案ずるに蓮師再興の初期に所謂無碍光流と云へる妨難が起こりしことは『叢林集』古本七下九紙及び『堅田日記』などに出で、又同時に一向宗と云はるゝやふな事となりて、今宗を他宗からは造惡はゞかりなし、たゞ一向に彌陀を念ずれば往生すべしと勸むるとの妨難を向け、堅田金ケ森の道場が破壞せらるるに至れり。『堅田日記』では無碍光の本尊を奪ひ取られ、本福寺法住が種々の手段又は辨解を試みて取り返したるなど、皆一は他山の誤解と又門徒に心得違の者もありし爲なりしやうに見ゆる。箇條の御文掟の御文は多く是が爲に成る。これに依りて蓮師の再興いよ〳〵緒につかんとする頃よりは、歸依の道

俗に對しては、多く六字尊號を認めて與へ給ふことゝなりしには非ざる歟。

橋川正君の編輯に成る『江州野洲郡史』上（三五〇頁）に野洲郡地方を山徒の襲擊せしを叙する中に

この擾亂が蔭涼軒日錄には如何に記載されてゐるか顧みておく必要がある。寛正六年三月二十四日條に「三會院領江州赤井庄就無碍光宗之事、自山門及違亂、仍被停止之。御奉書、可被仰付之、以伊勢下總守申之。御領掌被仰付于山門奉行布施下總守、即召雜掌命之。」とありて、足利幕府からは、牒を發して違亂の停止を命じたることが判る。

と、多くの文書が引きてある。この寛正六年は蓮師五十一歳なり。これを以ても其一斑を知らるべし。

今述べたる所は、內面よりは安心教化の軌範が六字より開示せられ、外部に對しては無碍光流一向宗と名けたる妨難を避けて、勸化の功を收めらるゝことなりしやふに思はる。要は彌陀大悲の本願を信樂して光攝中に報恩の稱名を喜ばしめたいとの思召しに外ならぬのである。

七

却りて兩祖の意を案ずるに、宗祖が事ごとにと申すほど無碍難思の語を仰せられたる御意は、惡人正機の別願を御身に受けて只管御喜びあそばすより、特に佛願の大悲眞實を慶嘆したまはんための故と窺はるゝ。無碍難思の祖釋を注意し、『歎異鈔』『口傳鈔』『改邪鈔』にあらはれたる御物語を拜見する時、かくの如く思はるゝのである。それが佛身の方は難思無碍光、名號の方は六字と其相を分つ時、行卷と眞佛土卷との所明となつて顯はしたまひたものと見えたり。これが行信兩卷如實修行を顯す時、淳一相續心の信心に於ける無碍光如來實相身爲物身の名義相應となる。

今蓮師へ來ると、佛身を顯すも、佛號を示すも、一南無阿彌陀佛の六字名號を以てしたまふに至りしは、前述の內外兩意あることなるべしと思はるれども、隱遁的に終はらせられたる宗祖と、京田舍の愚凡を所被とする教化門の蓮師との間に、御示の樣子に左右あるものならざる歟。則ち蓮師はいかなるものにも會得の出來るやう簡明にさしよせて安心を教示したまはんためなるが故と見ゆる

蓮如上人の安心決定鈔御依用の意

〔所歸の人法と安心決定鈔御依用〕

一

『安心決定鈔が』、『蓮如上人御聞書』に四十餘年が間、御覽候へども、見あかぬと仰せられ、又金をほり出すやうなる聖教なりと仰せられ（御聞書二五一條）或は大阪殿にての仰せに、此間申しゝことは、安心決定鈔のかたはしを仰せられ候由に候。然れば當流の義は、安心決定鈔の儀くれ〳〵肝要と仰せられ候（同二五二條）とある。又『帖外御文』卷四（五十七通）文明十八年十一月二十六日の御文には當流の信心のをもむきは、安心決定鈔をよく〳〵披見すべし云云と教示したまひ、同三（卅七通）には『夏の御文』（初通）の明應七年五月と同く、『決定鈔』の御語を以て教化したまふ。其他の帖外御文のみならず。『帖內一四（第八通）

文明十七年十一月廿三日八ケ條の第八條、及五（第五通）の如き、『御聞書』（第一八五條）の如き、盛んに此鈔の語を以て勸化してある。精細に拾はゞ迚も枚擧するにいとまない程である。これらの年代は何れも七十有餘の御老年の敎化たること は明かである。（大阪御隱栖も八十二歳であり、四十餘年が間御覽あるからである）併し『帖內』三帖（第七）文明七年二月廿三日の御文などを見れば、北陸滯在のころより既に此鈔に注意されてあつたことが知らるゝ（此年八月下旬吉崎燒打のため、河內へ移りたまふ）此外『御聞書』第八第九兩條には空善に對して此鈔の語の會通あり。

二

然れば蓮如上人は御一生を通じて、列祖御相傳の聖敎の一として、此鈔を尊信し讃仰せられたことを思ふ。これに依つて西派の學者は勿論、御一派にても分派當時の長福寺慶秀贈講師の『私記』には存覺師の撰とし、延壽寺月感贈講師の『糅記』などは、覺如上人の親撰として居られる。それは蓮師の御孫蓮悟の子顯誓公が、『反古裏』（五十六右）に、覺師の高弟乘專が報恩講私記、口傳鈔、改邪鈔、安心決定鈔等の聖敎をのぞみ申されて覺師より授けられたからであらう。

然るに靜に決定鈔を見ると、どうも宗祖、覺師、存師の御敎示や御詞遺に、ピツたりと合ひ兼るやふに見ゆる所がある。そこで初代講師惠空師は老年に及んで、これは西山流の書に違ひないと見定めて『翼註』を書かれ（眞宗全書所收）皆往院鳳嶺師は四義十證を以て西山書たることを決せられた（眞宗大系所收）我一派の學者は皆西山書として取扱ふに至りたのである。依つて二百年來、兩派學匠の此鈔に對する見解の相違より、蓮師御依用の意を窺ふに於て、大に異るものあるは、已むを得ぬことであつた。

惠空師は禪林寺（永觀堂）の助參公に尋ねられたる時、當流の書也と答へ、西山鵜

木の兩部に涉らざる人には披見せしむべかず云云の奥書ある古寫本を示され、西山上人の『述成』と合册になつてあつたと記された。上杉惠岳教授所持の古寫本、亦同樣の奥書ありて、『述成』其他の西山書と合綴してある。近來粟生光明寺關本諦承師も、『信仰講話』の中に特に此鈔について述べられ、此鈔は西山流特に我が本山義流の書也と云ひ、本山義の中でも示導實導あたりの作ならんとまで申さるゝに至つた。依つて西派新進の學者の中には、これを認むるに至つた由を傳承する。

三

果して然らば、蓮師が此鈔をあれ程までに讃仰推奬したまひしは何故なりや。これ此小篇に攻究せんとする所である。

抑も宗祖以來傳承の教義は、宗祖の御撰述は勿論、覺師の『執持鈔』『口傳鈔』『改邪鈔』、存覺師の『六要』其他の書に示され、蓮師再興の宗義は全く是等の章疏を飽くまで披覽して出でたるものなるは云ふまでもない。而して覺師が諸流を研學したまう時、西山流は樋の口（今の萬壽寺通り）安養寺阿日房彰空より受けたまひ（慕歸一右十敬重五左十四）存師亦同く阿日より傳へたまうた、（一期記十八歳の條）此決定鈔も或は阿日より傳へたまひ、特に當流の宗義を味ふに便ありとおぼしめして、自著と共に乘專へ授けられたかと云はるゝ。併し關本師は本山義の書也と申されたことゆゑ、阿日の系と異るものがあるを以て、或は別に寫傳したまひたと見るが適當であらう。西山靜見の『法水分流記』では阿日は東山深草の兩義を傳持せしが如く見らるゝからである。兎も角覺存二師より西山の學問が入り來たれるものたるは疑ふ餘地はない。

西山の名目などが入りし一二を申さば、（一）機法一体の目。覺師の『願々鈔』にあらはるゝを始とす。蓮師の盛んに依用せらるゝは、正しくは『決定鈔』よりと

見ゆれども、兎も角、生佛不二の義と同ずる此の名目が、當流ではそれが轉用さるゝに至りたのであるに注意せねばならぬ。(二)名体不二の目。存師の『六要』八九左に出でて、蓮師では『帖外』三(三十七通)に見ゆ。是亦『決定鈔』より取りたまへるは勿論である。(三)佛体即行の事。『帖外』三(第卅七通)及『夏御文』(初通)等に出づ。是亦同じ。西山の流祖以來常に盛んに用ゐられたる名目などが、覺存二師に見えかけて、而も『安心決定鈔』よりして蓮師の上に盛んに依用さるゝことゝなつたことを注意すれば足る。

惠空鳳嶺賢藏等の諸師、『決定鈔』の錄にも詳細の説あれば、參照さるればは便宜あるべし。

四

今こゝに蓮師依用の意を窺ふに、種々に考察せらるべしと雖、且く佛体名號の關係(所歸の)よりせば、常に申すが如く元祖已前の願生者は概して觀念の行を要としたのである。支那でも淨土論系と觀經系との左右あれども、隋の淨影天台嘉祥の三大家が、『觀經』を觀佛爲宗と見、宋の元照は唐の善導楷定の説を見つゝも其を取らずして、淨影等に依れるに非ずや。曇鸞の『論註』下に願偈大意と名けたるは觀見願生なり(宗祖の説は別に在り)我朝では智光が一論に依りて曼荼羅を畫きて願生せし正業は觀念であり、中將法如は觀經に依りて曼荼羅を作れり。曼荼羅は觀念のためなること注意を要す。平安朝に入りても大体はみな稱名によりて觀成を期したること、一々列示せず。降りて元祖宗祖の在山時代は觀念を正業とせられたるため、多年の煩悶を重ねたまへりしことは、兩祖の御傳及び御法語を注意せば、秋毫も疑ふことは出來ぬ。

然るに觀念は、廣くは淨土の莊嚴別しては彌陀の佛身を目がけて修するの故、散亂の機は成じがたく、たとひ成就することもあるも、一時的の事にて

永續することは、甚だ覺束ない。故に不安と寂寥とを免るゝことあたはずして、佛と離れざらんと努力するも、常に不安の念に襲はるゝことゝなる。元祖が此の苦悶よりして、遂に雜行をすてゝ正行に歸し、正行の中特に一心專念の文によりて、願彼佛願故の文、深く神に染み心にとゞめたるなりとて、本願の念佛を信じて決定さるゝに至つた。これ佛の方より易行の稱名を選擇して與へらるゝに氣付きたまひたからである。終生如來の本願だから念佛せよ〳〵と勸められたるは此の故である。觀念は行者より佛を追求するに引きかへ稱名は如來久遠の本願より授けらるゝの故、これを信知するとき、佛は待ち受けて攝取したまうのである。この旨を如實で傳承されたるが今家の宗祖である。本願に歸するの故、信心が正因たるは自然の道理である。

然るに元祖門下、多くは本願だから稱名せよの敎を、口の稱名で受けた。口稱の功によりて臨終に始めて佛の來迎したまうことゝ心得たる故、平生は

佛と離れて居る。そこで觀念時代と同じく不安と寂寥とを免るゝことは出來ぬ。現在見佛の難成の不安が、臨終來迎の不安とかはつたばかりである。鎭西、長樂寺、九品寺など、其敎義に多少の異はあれども、みな此の處に不安がある。

五

獨り西山上人のみは、所謂佛体即行にて名体不二の故に機法一体の故にとて、衆生の往生をかけものにしたる本願成就の佛体に中心を置いて、善導元祖の敎義を解說せんとしたのである。其系統より出でたる『安心決定鈔』また大体然りと申さねばならぬ。元祖の直門下より佛体中心の說が顯れたのは、一寸理解しにくい所であるが、前述の臨終來迎の稱名に於て不安と寂寥とを感知せられたのでは無からうか。觀念の產物と見らるゝ曼荼羅に注意をして『註記』まで書かれたるは、元祖門下としては實に異彩である。鎭西では漸

く七八兩祖の教義回轉より曼荼羅に注意を向けらるゝに至つたのである。

今述べたる所に關係ある西山系を略抄せば

此中西山の本山義は示導より起これり。

今家では『御本書』後序に在る如く宗祖は自ら「雜行をすて、本願に歸す」と入信の相を陳べたまひ終生本願を高潮したまひしことは、御選述や御法語を見れば、明に會得せらるゝ所である。本願とは念佛往生の本願である。久遠の大悲を傾けて回向成就したまひし如來の本願である。其体名號なれば、本願をきくも、名號を聞くも全く一である。今本願の意義を案ずるに、能願より云はば如來選擇の願心、所願より云はば佛の名號である。誓願名號同一と云ふは、全く此旨を示さるるに外ならぬ。此の意味に於て亦名体不二存疊所用と云はるゝのである。

七

蓮如上人幼少の頃は、本廟の衰退其極に達し（御聞書一四二條以下）目もあてられぬ狀態であつた。而して鎭西では京に禮阿向阿の高德の出でたる後であり、關東では了譽酉譽の盛んに化を布きたるあり。西山亦諸派に高僧輩

出せし頃であつた。特に鎭西流の感化最も盛んにて、京田舍に通じて、念佛すれば臨終に御來迎にあづかると云へることが、當流門徒の中にも多く信ぜられて、信心肝要平生業成の旨は全く忘失されてあつた。再言せば稱ふれば臨終に來迎があると心得て、稱名の法に拘はつて彌陀の心光攝取にあづかる旨を知らなんだのである。此間に出でゝ勸化を垂るる蓮師ゆゑ彼等の稱へ居る稱名より名號のいはれを開示して、彌陀はたのむものを待ちうけて攝取したまう御いはれが南無阿彌陀佛ぞと、さしよせて教示せられ、直ぐに頂かるゝ一念歸命の信心を本と勸めさせられたのである。帖内帖外の御文及び御物語等に注意せば、必ず會得せらるゝところである。

此外『御文』一（初通）同（第十五通）三（第二、第四、第五通）五（第十一通）及『夏御文』など到處この旨を示さる。されば蓮師の所對は種々の異計ありと見ゆれども、正しくは單口稱臨終來迎に在りしや明かである。こゝに於て覺師より代々傳持されたる『安心決定鈔』を特に出だして教示したまうことの的切なるを思ふ。蓮師御修學時代より、宗の本典たる『教行信證』『六要鈔』を表紙の破れるほど御覽じて、百のものを十、十のものを一にして、さしよせて示さるゝ『御文』ゆゑ、宗の安心は宗祖傳承の信心である。それを示さるるには特に此『決定鈔』を依用されたのは、教義にては法より人を引き出して示すに便あると、歴史にては覺師の傳へられたる由緒深き書なる故であると思はるゝ。

要するに蓮師當時の淨土教界求道上の問題として人法一致の安心を示すには、聖人相傳の宗義たる教行信證の旨をさしよせて示さるゝには、『決定鈔』を以てするを最捷徑と思惟したまひたものと拜窺するものである。

八

前にも一言せし如く『決定鈔』を推奬し、時々其の語や名目を用ゐられる

について、直に宗祖以來の正義とは合いにくいものゝあるは已むを得ぬことである。そのために特に會釋したりして、斯樣に心得よと敎示したまへるものあるは、改めて詳辯を要せぬであらう。例せば機法一体の如きも、生佛不二と見えたるを、歸命の衆生と彌陀の御たすけとの機法一体と解し、或は他力ノ願行ヲヒサシク身ニタモチナカラ云云の、十劫以來久しきことゝ見えたる文を、キヽワケテ、エ信ゼヌモノと解されたる如きは、すべて信心中心を以て宗祖相傳の宗義に取りなしたまうた所に、蓮師の意の存するを思はしむるのである。

九

已上は所歸人法の問題の側面觀として、求道上の實際方面より、我先輩が申されたる『決定鈔』蓮師御依用說の消極說を今は積極的に考察せんとしたのである。

- 元祖――捨雜行歸正行
- 宗祖――棄雜行歸本願
- 蓮師――捨雜行歸彌陀

この御詞遣によつて三祖弘化の表示の異れるを思ふと同時に、求道上の實際問題に於ては、人法の偏廢すべからざる事が明かに知れ、偏廢せば必ず求道心の滿足を得ざる旨を會得せらるゝであらう。而して現代の宗門求道者は何に苦悶しつゝあるかを注意し、自行化他に於て、眞摯に考慮したいものと思ふ。

重ねて云ふ。所歸の人法を論ずる時、たゞ名號とあるから法、彌陀とあるから人であると云ふは大体それに違いもなからうが、只それでは信仰上の所歸問題を考察するに於ては、物足らぬ感じがする。そのために右求道上の立ち場より、蓮師が『安心決定鈔』を御依用になつた意を窺ふて見たのである。

已達の指敎を仰ぐ。

『御文』の編者が文明三年五十七歳の盆の御文を初に安じて、其以前を略し、又『御一代聞書』の編者が明應二年七十九歳年頭の物語を最初に出だしたる、みな蓮師御教化の歸趣は、全く念佛の自力他力をきゝわけて、平生業成の安心を得よとある旨を指示されたるものである。口稱に拘はつて安心し得ざるものに、名號のいはれより佛の大悲を示さんとするに在る故、西山に用ゆる機法一体の目、名体不二の目まで取り來たりて、法より人即ち本願成就の御名が六字ゆゑ、六字の義が、歸命するものを攝取せんと待ちわびたまへる彌陀ぞと示さるゝことゝなつた。三帖第三性光坊門徒への『御文』にタヾコエニイダシテ念佛バカリヲトナフルヒトハ、オホヤウナリ、ソレハ極樂ニハ往生セズ、コノ念佛ノイハレヲヨクシリタル人コソ、ホトケニハナルベケレ、ナニノヤモナク彌陀ヲヨク信ズルコヽロダニモ、ヒトツニサダマレバ、ヤスク淨土ヘハマイルベキナリ』云云の御語、最も明白である。

文類偈の西方不可思議尊

宗祖八十餘歳の老年に、御本書『教行信證文類』を略鈔して『淨土文類聚鈔』を撰集し、その中に「念佛正信偈」を作り給ふ。之を世に「文類偈」と稱す。偈の最初に歸敬のために西方不可思議尊の一句を安じ、それを一偈所讃の体としたまふ。不可思議尊とは『讃彌陀偈』十左自利々他力圓滿。歸命方便巧莊嚴。乃至稽首不可思議尊に依りたまふ。『讃彌陀偈』三十七名の第二十九なり。又第三十七に南無不可思議光の佛名あり。全体『略文類』は願成就の意に依りて明したまひた故、今も第十七願成就の諸佛讃嘆の無量壽佛威神功德不可思議にて、それを直次の第十八願成就に諸有衆生聞其名號と受けてあり。その上に西方の二字を冠す。これは三經所說の西方淨土にて七祖傳承の正意なり。故に彌陀は欲生我國と誓ひ、釋迦は願生彼國と勸む。宗祖この二

尊の教勅に信順して、御晩年特に淨土を憧憬して西方の不可思議尊と讃仰したまふ御意なり。

然れば西方の不可思議尊とは、淨土の如來を指す語なれども、願成就の無量壽佛の威神功德不可思議ゆゑ、我等往生の正業正因としては、因位の萬行果地の萬德を名號に攝在して授けたまふ。これが彌陀不共の別德にして聞其名號の一念に往生の定まるは此旨なり。若し我等往生の行が佛身に在りとせば、得定見佛の叶はぬ凡夫は往生することは出來ぬ。此旨は元祖が彌陀選擇の願意を勝易の德ある念佛に在り。往生之業念佛爲本と定めたまひ、念佛即ち南無阿彌陀佛なれば本願名號は正定業なり。之れを信受奉行すべしと三心章の正意を傳持しまうたが今家の吾祖なり。然るに易行の稱名なればとて、能稱に約して誓ひたまひし願意を忘れて口稱の功を募らば、定散自心に惑ふことゝなりて、折角別願を立てたまひし大悲を空しくするものなり。こゝに於て行より信を別開して教示したまはねばならぬことゝなつた。故に我等凡愚は佛智の不思議を信ずる信心によりて往生を決定するにきはまる。宗祖時々名號を功德寶海や不可思議德海の語を以てしたまふた所以は、名號を概念化する口稱に拘はる稱名ではない旨を示されたる御意を味得せねばならぬ

（行卷自釋九右化卷自五十三右等）

西山に名体不二や佛体即行の名目があらはれ、佛体中心の教義となりては、遂に觀念の念佛に逆轉したことゝなる。又口稱に功を入るゝ鎭西及び長樂寺末流では全く名號を概念化化石化して、定散自力に墮することゝなる。能く己が分を思量して本願の不思議を仰ぎ無碍の大信心海に入りてこそ御流に流を汲みたる所詮なれ。（文類偈講讃抄出）

巳上の四小篇、十餘年來隨時の起稿にて、或は重複或は不備、全く研究途上の未定稿のみ。幸に叱正を蒙り得ば、幸甚の至りなり。（丙子九月初旬）

昭和十一年九月三日印刷
昭和十一年九月七日發行

名古屋市中區下茶屋町
大谷派名古屋教務所内　代表者
發行兼編輯人　松岡亮

名古屋市中區梅川町三八
印刷人　下里誠

名古屋市中區梅川町三八
印刷所　三誠堂印刷所

名古屋市中區下茶屋町
大谷派名古屋教務所内
發行所　住田學長
稻葉謙師　頌讃會

終